

分かつことのできない二つの名前…敦煌とポール・ペリオ

ナタリー・モネ

卓抜な語学力と行動力

学者ポール・ペリオ（一八七八―一九四五）という人物抜きに、敦煌の仏教遺跡、さらに広く言えば極東研究を語ることはできない。彼の業績は、二十世紀前半に発表された学識豊かな八百以上の論文からなっており、それらの論文は、インドシナ、モンゴル、中国、中央アジアからイランに至るまでの歴史を含む諸分野研究の基本であり続けている。限らない好奇心と驚くべき記憶力を備えた知性のもち主であり、また几帳面

で細心な文献学者でもあったペリオは、古代および現代の中国語を完璧に会得しており、それをトルコ語、ウイグル語、モンゴル語、チベット語、サンスクリット、その他の希少な言語など様々な言語の習得にうまく結びつけることができた。さらに、ペリオは美術品や書籍の収集力ばかりでなく、彼のおかげでフランスのコレクションに入った碑文や写本の出処を自ら確認するという能力まで示した。

それでいて、書齋に閉じこもった学者とはほど遠く、ペリオは比類のない勇敢な探検家の気質をもっていた。

一九〇〇年、「ハノイのフランス極東学院から」北京に派遣された彼は「義和団事件に巻き込まれたが、包囲網を二度突破するなどして」、二十二歳でレジオン・ドヌール勲章を授与されて名声を得、その後も一九一四年に赴任したダーダネルス海峡（マルマラ海とエーゲ海を結ぶ海峡）における戦役によって、戦功十字勲章を受けた。中央アジア遠征中、ペリオは躊躇なくキャラバンを離れ、馬に乗って山々を駆け巡りながら、忘れられたルートの跡を調査し、また遠く離れた遺跡にある碑文を収集した。フランスへの帰国（一九〇九年）後、ほどなくして彼はコレージュ・ド・フランスの教授に任命され、一九一一年に彼のために創設された「中央アジアの言語・歴史・考古学」講座を担当した。戦争中や旅行中のみ一時的に中断したことはあるものの、彼は一九四五年に亡くなるまで、教育と研究に自らの人生を捧げた。

中国語専攻で東洋語学校を卒業し、政治科学学院で英語学士号を取得したポール・ペリオは当初、外交官としてのキャリアを志したが、中国学者のエドゥアール・シャヴァンヌやインド学者のシルヴァン・レヴィ

などの当時の最も著名な東洋学者たちから注目を集めるようになり、シルヴァン・レヴィから、古代アジア研究に進むよう説得された。そしてペリオは、ハノイに新設されたフランス極東学院の教師としてキャリアをスタートした。一九〇〇年より、同学院のために芸術品や書籍を購入する目的で、彼は定期的に北京に派遣された。

ドイツ、イギリス、ロシアなど他のヨーロッパの強国にならって、フランス政府も、地球上で知られていない地域の一つである中央アジアに、フランス探検隊を派遣することを決めた。この重要な任務を担った探検隊の長に任命されたペリオは、一九〇六年から一九〇八年にかけて、この広大な地域を縦横に走りまわった。さらに、中国文化の研究に不可欠なツールとしてフランスの中国研究者たちが自由に使用できるように、数千にも上る中国語の資料を得るため、彼の中国での旅は延長された。旅の途中、北京に立ち寄った彼は、この機会を利用して、北京の学者たちと友好関係を結び、敦煌でたぐいまれなる中世写本が発見されたこと

を伝えた。⁽¹⁾

中国仏教を歴史的観点から研究

ポール・ペリオが、中国仏教についての認識に計りしれないほどの貢献をしたことは、ほとんど知られていない。一九〇三年にはすでに、彼の著作の中に中国仏教というテーマが現れている。ペリオは教義的な関心からではなく、仏教という宗教の歴史的発展への関心から、中国仏教の研究に着手した。「もろもろの哲学や宗教は、時代や環境といった所与の諸条件の中で生まれ、進化し、衰える。これらの条件をこそ知らなければならぬ」と彼は記している。中国に根付く過程で仏教が通過していった場所を厳密に確定し、シルクロードを往来していた僧侶たちの話の分析に彼は専念する。彼はまた、中国本来の思考体系である道教と、当初は異文化として中国に受容された仏教の関係を研究する。そして、道教と仏教が教義を借用し合ったり、あるいは相手が自分からつかんでいった教義を取り戻そうと努力していたことを明らかにする。彼は、仏教

と道教の習合(シンクレティズム)に関心をもつ。それは、民間に広く流布した『老子化胡経』^けに見られるもので、そこには「道教の聖なる創始者・老子は、中国の西の国境で姿を消してしまいが、後に、まさにこの西方からその教えが再び現れ、仏教という名で中国帝国全土に広まる」とある。

ペリオは、インド語、ソグド語、中国語などの言語学的側面とともに、それぞれの言語による仏教の比較研究にも関心をもっていた。彼が仏教に関することがらについて研究し執筆した論文は百以上にも上る。なかんずく彼の最も輝かしき貢献は、中央アジアで行った派遣調査に結びついている。この任務において、彼は様々な遺跡を発掘し、特にクチャ地方ならびに敦煌での調査研究を行った。より正確に言えば、ゴビ砂漠とタクラマカン砂漠の端に位置する敦煌の町のはずれにある中国のオアシス「莫高窟」すなわち、他に匹敵するものがないほど卓越した石窟群^{くわくぐん}で調査は行われ、彼は数カ月そこに滞在した。紀元五百年くらいからのものと推定される数百の岩窟を、彼は詳細に調査した。

蔵経洞にこもって文書類を調査するペリオ（1908年）

No Image

壁上のささいな碑文も書きとめながら、彼は完全な目録を制作し、主要なフレスコ壁画や塑像の写真を撮らせた。フランスに帰国した彼は、不慮の出来事が続いたにもかかわらず、⁽²⁾これらの未発表のネガを出版することに努めた。彼の科学的調査によって、敦煌石窟の初の目録が作られ、二十世紀初頭の模様が記録され、保存されている。その業績は今なお中国仏教美術専攻

の歴史学者たちのために、こよなき研究材料として役立ち続けている。

岩に掘られた洞窟の一つである小さな第十七窟に隠されていたのが、六万五千点以上の写本という文献上の宝であった。最も古いものは五世紀にさかのぼり、最も新しい写本でも十一世紀初頭のものである。ここには一万点以上のチベット語写本、さらに、すでに絶滅した言語で記された数百点の写本も埋蔵されていた。

一九〇八年三月、ロウソクのほのかな明かりに照らされたこの小部屋で縮こまりながら、ペリオは四千点以上の中国語写本、それとほとんど同数のチベット語写本、その他、少数ではあるがソグド語、ウイグル語、サンスクリット、クチャ語、ホータン語などの中央アジアの言語で記された写本の巻物を広げ、選び出すために、三週間をそこで過ごした。⁽⁴⁾彼は、そこでヘブライ語の祈祷文書のテキストも発見した。このような言語の多様性は、文化の交差点としてのこの中世の遺跡の活力を証明している。ペリオによって選ばれた資料は、この遺跡を守っていた道士との交渉により、一九

○九年の終わりにパリに到着した。フランス国立図書

館は文書類を受け入れ、ルーブル美術館は美術作品・絵画を受け取った。これらの品々は、直ちにルーブル美術館のギャラリーに展示され、後にギメ美術館に収められることになる。仏教をテーマとした敦煌の壁画と帛画（絹絵）は、知られている限り中国最古のもので、他のいかなる遺跡でも、これと同時代の資料は保存されていらない。ペリオが持ち帰った写本、經典、様々なテキスト、古文書を、数世代にわたって専門家たちが直接見られるようになったおかげで、様々な分野の研究が豊かなものとなり、特に中国仏教がよりよく理解されるようになったのである。

〔一〕内は邦訳に際しての補注

訳注

（１）

一九〇九年夏、ペリオは、前年に敦煌で入手した写本の一部を北京の学者たちに見せた。ペリオの少し前にはイギリス隊のオーレル・スタインが大量の写本を持ち去っていた。中国の学界には驚愕と文物流出への危機感が広がり、敦煌写本保護への動きが開始された。

（２）

帰国後、持ち帰った文書類が偽造ではないかと疑われ、激しく非難されるなどした。彼よりも先にイギリス隊のスタインが数千点もの文書や絵画を安価で買い取り、持ち帰っていたため、もはや真正の敦煌文書は残っていないと思われていたからという。実際には、中国語に堪能なペリオが持ち帰った文書は、精選された貴重なものばかりであった。

（３）

後に「藏経洞」と呼ばれるようになる。

（４）

「ヘブライ語免罪符断簡」と呼ばれている。ヘブライ語聖書（旧約聖書）のイザヤ書と詩篇が引用されている。紙本墨書。八・九世紀。

（５）

道士・王圓籙。彼は一九〇〇年六月、「第十六窟」の主室に入る通路の壁の向こうに、四畳半ほどの小さな隠し部屋のような空洞を発見した。これが「第十七窟」とされた。

Nathalie Monnet / フランス国立図書館主任学芸員。東洋文書部門で敦煌文書や中国文献を担当。